

世田谷村日記

石山修武

九月十七日

九時二〇分新宿で打合せ。十一時過五反田で友岡社長と打合わせ。十四時過迄。友岡氏は私のクライアントであるが、率直な意見を述べた。趣味の悪さは少し直していただかないと附合えない。お互い、ある程度の年令に達している人だから、あんまりガツガツするのはコントロールしたい。趣味は思想なんだ。十四時半研究室。コンビニ弁当の昼食。十五時公開講評会。十九時半迄。新鮮さは伝わってこない。二〇時半迄、先生方と談笑。パウハウス建築大学からの学生とおしゃべり。今日は二次会は参加せず、お先に失礼して帰る。久し振りに、目一杯な一日であった。今日は午前中に会った友岡社長の心中察して余りある。社長業は本当に孤独なのだと思う。

九月十八日 日曜日

山口勝弘先生と電話で話す。元気そうであった。午前中募参り。その足で三軒茶屋の保坂展人の選挙報告会へ。保坂邸は故毛綱モソ太設計である。会は社民党支持者で溢れていた。年寄りの女性達にはある種の品格がある。旧社会党の浅沼稻次郎（山口二矢に刺殺された）、鈴木茂三郎といった指導者時代の名残りが漂うのである。背を丸めて会場にたたずむ老女達にはその歴史が匂う。しかし、男達がかもし出す雰囲気は圧倒的に良ろしくない。何しろ品位が無い。マイナーサークルのパーティーの印象しか無い。保坂だって衆議院議員なのだ、レッキとした政治家である。それ

が、こんな負け慣れた連中だけのサークル的パーティーやっては駄目だ。先ず、とり巻きを一変しなくては、社民が戦う姿勢を示さなければ、何の価値もない。フリーター、ニート、障害者、そして差別を意識する女性しか、支持基盤が今無いとすれば、それをもっと明快にして、党の再組織化を進めるべきだろう。

九月十九日

午後、用事があつて成田空港へ。朝は数冊を乱読する。鎌田慧から辻邦生まで。辻邦生のモノは二度目の通読だったが、少し理解が進んだ。安土往還記で辻邦生が書きたかつたのは信長とキリスト教宣教師達との間にあつたある種の共感だった。理にかなう事への意思の有無への自覚である。安土城の炎のページェント、そしてその炎の安土城の聖堂への噴流とも言うべきクライマックスの情景は生身の辻邦生の穏やかさ、沈潜静寂をいささか知る人間にとっては余りに激しく、余りに熱いが、それが辻邦生の核なんだと良く解つた。西行花伝に流れるものも、その激しさだ。軽井沢の辻邦生の夏の家は磯崎氏の夏の家に隣接してある。辻さんが亡くなつてから初めてその中に入った事がある。印象的だったのは、その内のほのかな暗がりの連続であつた。謂わゆるモダンな建築には無い暗さである。闇と呼ぶ程に大仰なものではない。しかし歴然とした暗さが在る。樹々の緑の向こうに浅間山が見えた記憶がある。この、ほの暗さの連続は磯崎と辻を結びつけるものであつた。今ようやく、その事が良く解る。